

# 学会だより No. 97 2013年6月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

## ☆第 78 回哲学会大会のお知らせ

今夏は下記の要領で第 78 回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうへご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。尚、前大会と開始時間が異なりますので、ご注意ください。

**日時：2013年6月30日（日） 13：30～17：00**

**会場：上智大学 12号館 1階 102教室**

### ★プログラム

#### I 研究発表 13：30～15：30

○持地秀紀（本学博士前期課程）

ベルクソンにおける「意識」の概念

——ベルクソンのプロティノス受容——

○加藤之敬（本学博士後期課程）

初期ニーチェの真理観における「忘却」の二義性について

○有田竜朗（本学博士後期課程）

トマスとハイデガーにおける超越者としての真理について

休憩 15分

#### II 講演 15：45～16：45

○平山敬二（東京工芸大学教授）

和辻哲郎の『風土』とダゴベルト・フライの『比較芸術学』

#### III 懇親会 17：30～19：30

会場：上智大学 11号館 7階第2会議室

会費：学生 2000円、一般 3000円 本学哲学科教員 5000円

## ☆講演要旨

### 和辻哲郎の『風土』とダゴベルト・フライの『比較芸術学』

平山敬二（東京工芸大学教授）

非西洋世界にとって、近代という時代がそのまま世界のヨーロッパ化を意味するものであったという側面を有することは否定できない事実であろう。芸術の分野においてもそれは例外ではなく、西洋の自然科学が有する普遍性と対をなすような形で、ヨーロッパの芸術には、人類文化にとって範例とすべき普遍的価値が認められ、いわば特権的とも言える地位が与えられてきた。そこでは西洋の芸術文化は普遍的なもので、それ以外の非西洋の芸術文化は単に特殊なものでしかないという構図が成立していたと言っていいたいだろう。

しかしポストモダンの時代と言われる今日において、その構図は大きく崩れつつある。普遍的なものとして扱われてきた西洋文化それ自体の特殊性と限界が指摘され、逆に特殊なものとしての地位に甘んじていた非西洋圏における固有な文化自体の見直しと再評価が時代の趨勢となっている。このような時代状況の中で、皮肉なことに、戦前の国家主義的文化論に加担したに過ぎないとの厳しい批判に戦後さらされた和辻哲郎（1889-1960）の『風土——人間学的考察』（1928—1935年）は、かえって現代におけるポストモダンの文化哲学に有効な基礎を与えるものとして捉え直されている。

和辻はこの著作において、文化の根底に捉えられる風土的性格を描き出し、それぞれの文化の在りようがその地域固有の自然の在りようといかに密接に結びついているのかを明らかにした。その視点は、西洋文化そのものをヨーロッパの特殊な自然の在り方に基づくそれ自体特殊な文化としてその価値を相対化することを可能とする。一方、美術史学におけるウィーン学派の泰斗であるダゴベルト・フライ（Dagobert Frey, 1883-1962）は、その著『比較芸術学の基礎付け』（Grundlegung zu einer vergleichenden Kunstwissenschaft, 1949）において、西欧美術を他の非西欧文化圏における美術との比較考察の中で相対的に捉え直す道を基礎付けた。

ほぼ同世代に属する東・西のこの二人の碩学の研究成果を対比的に考察するとき、両者は互いの研究成果を知る由もなかったはずであるが、そこには見事な照応の関係が見て取れる。諸民族、諸文化圏の文化的な多様さにおける特殊性と普遍性との問題は、単に並列的にだけ捉えて済ますことのできないものでもあるが、この両者が提示した諸文化を相対的に捉える視点は、現代におけるグローバリズム（地球一体主義）とプルーラリズム（文化的多元主義）の問題を考察するための示唆に富む基礎を提供している。

## ☆研究発表要旨

### ベルクソンにおける「意識」の概念——ベルクソンのプロティノス受容——

持地秀紀（本学博士前期課程）

ベルクソン（Henri Bergson, 1859-1941）は不動のイデアこそが真に存在する実在であると説く古代ギリシアの形而上学に対して、生成変化するものこそが真の実在であると説く形而上学を打ち立てたことから、伝統的なギリシア哲学に対抗した哲学者として一般的に理解されてきた。とりわけ、ベルクソンはプロティノスに対しては、その学説を「行為は観照の衰弱である」と説くギリシアの形而上学と見做し、「形而上学入門」（1903）から晩年の『道徳と宗教の二源泉』（1932）に至るまで、繰り返し批判的な考察を重ねている。しかし他方で、ベルクソンが単純な批判に終始することのない強い関心をプロティノスに対して抱いていたことも事実であり、ベルクソンがプロティノスから多大な影響を受けていたことはこれまでも多くの研究者たちによって指摘されている。

近年、ベルクソンが自らの遺稿において出版を禁じた講義録が公刊されたことを受けて、生前の著作と講義録とを含めた総括的なベルクソン研究が試みられている。なかでも 1898 - 1899 年にかけて行われたとされる「プロティノス講義」は、ベルクソンにおけるプロティノスからの影響を探る上でとりわけ重要な資料となっている。

本発表の目的は、「プロティノス講義」でのベルクソンのプロティノス解釈を踏まえた上で、講義後に執筆された『創造的進化』（1907）に見出せるベルクソンのプロティノス受容を、「意識」（la conscience）という概念に注目しながら探究することである。ベルクソンは「プロティノス講義」の最終節をプロティノスの意識論解釈に充てており、また講義の中で繰り返しプロティノスを「意識」という概念をはじめて解明しようと試みた哲学者とも論じている。これらのことから、ベルクソンがプロティノスを、とりわけ「意識」という概念において共感をもって理解していたことは疑いを得ない。こうしてベルクソンがプロティノスから多くの影響を受けているという前提の下に、『創造的進化』におけるベルクソンの「意識」概念を明らかにすることが本発表の課題である。

本発表では以下の手順で考察を行う。まず、「プロティノス講義」においてベルクソンがプロティノスにおける意識概念をどのようなものとして読解していたかを提示する。次いで、『創造的進化』へと目を向け、そこにおいてベルクソンが「意識」という概念をどのようなものとして論じているかを整理する。そして最後に、『創造的進化』におけるベルクソンの意識概念が、如何なる点でプロティノスに由来する古代的な概念を遺産として引き継いでいるかということ明らかにする。

\*

## 初期ニーチェの真理観における「忘却」の二義性について

加藤 之敬（本学博士後期課程）

初期の遺稿「道徳外の意味における真理と虚偽について」（以下、「真偽」）において、ニーチェは、真理を人間の生のための幻想であるとしている。ニーチェのいう真理には様々な意味が込められており、一概にすべてがこの意味で用いられているということとはできないが、本発表は、この人間の生のための幻想という真理観こそが、ニーチェの最も根本的な真理観であるという立場をとる。そして、このような真理の成立に深く関わっているのが「忘却」なのであり、ニーチェは二つの視点から、この「忘却」というものを論じているのである。まず、ニーチェは「忘却」によってのみ、人間は真理に達し、その生が可能となるとしている。そして、その一方で、「真偽」においても既に、「忘却」によって、ある種の道徳的な見方が成立するということを指摘している。

「忘却」の一方の側面は、前述したような人間の生のための幻想を真理であると錯覚することで、人間の生を可能とするということである。ここで「忘却」は、さらに二つに分けられると本発表は考える。まず、多様な直観を処理し、人間化された世界認識、つまり幻想を獲得するために、個々の差異を「忘却」する。そして、このようにして獲得した幻想の由来を「忘却」し、それを世界そのものの適切な認識、つまり真理であると思い込むことによって、人間の生は可能となるのである。

これに対して、「忘却」のもう一つの側面は、前述した由来の「忘却」によって、ある種の道徳的な感情が生じるということである。事物を適切に表現しなくてはならないという義務感から、自らが真理にかかわっているという感情、つまり世界を適切に表現しているという感情が生じることになる。現在において真理とされているものの由来が「忘却」されることで、そこに道徳的な見方が入り込んでくるという点を、ニーチェは指摘しているのである。

以上のような「忘却」の持つ二義性を本発表は論じる。これを「真偽」におけるニーチェの真理観について考察するための足掛かりとしたい。

\*

## トマスとハイデガーにおける超越者としての真理について

有田竜朗（本学博士後期課程）

マルティン・ハイデガーは『存在と時間』執筆の最終段階にあたる時期（1926/27年冬学期）の講義において、トマス・アクィナス『真理についての定期討論』を取り上げ、そこに判断や命題における真理に先立つ存在論的真理の動性への洞察を見て取る。このようなハイデガーの解釈の位相は、『存在と時間』第44節において「命題的真理」から「存在者の被発

見性」を経て「存在者の意味としての存在の開示性」へと遡源する現存在分析の位相と重なるものである。しかし講義草稿ならびに後から加えられた添付文書におけるいくつかのトマス批判、たとえば真理が「他との関係」、すなわち特定の存在者としての魂との関係においてのみ問題化されているといった批判は、「現存在が存在する限りにおいて、かつその間でのみ真理が存在する」という『存在と時間』における真理概念への自己批判として理解される可能性を有している。トマス批判においてすでにハイデガーは、真理を何らかの存在者からではなく、真理自体の動向から問題化する新たな可能性を模索し始めている。

他方で、知性と事象との合致というトマスの真理概念は、知性を人間的知性としての魂に局限化して理解するハイデガーの解釈を超え、存在そのもの *Ipsum Esse* の動性としての、ゆえにあくまで非存在者的な、神的知性の働きを射程に収めるものである。ハイデガーに従えば、神と被造物という問題系もまた、特定の時間理解に基づく存在理解によって規定された存在者間の関係という、いわゆる存在神論に刻印づけられた問題系へと矮小化されることになるが、神的知性と神的事象（神のエッセンチアとしてのエッセ）との合致、および神的知性と被造的事象との合致という問題構制においてトマスが問うているのは、存在者を存在者たらしめる存在そのものの動性であり、その意味ではトマスはここで真正に存在論的差異のただ中において思惟しているとさえ言えるのではないだろうか。

もちろん、存在者を、存在そのもののエッセ化する働きである「存在の現勢態 *actus essendi*」に与るものとして思惟するトマスの道と、1930年代以降のハイデガーの道、すなわち「存在は存在者ではない」という存在者の側から観られた形而上学的、意味論的差異を超え、存在の性起そのものに潜む覆蔽の契機から思惟された現出論的差異へと歩を進めようとする道とは、互いに大きく異なっている。安易な共測化に注意しつつ、超越者としての真理を手がかりに、トマスとハイデガーにおける差異性の思索を跡づけてみたい。

## ☆第 77 回哲学会大会報告記

去る 2012 年 10 月 28 日（日）に第 77 回上智大学哲学会大会が催されました。この大会では、「ドゥルーズにおける創造とその射程」と題する織田理史氏の研究発表、「「幾何学」に何が出来るか——カント『純粹理性批判』における幾何学の可能性と直観の理論——」と題する浜田郷史氏の研究発表、「プラトン『パイドン』の「親近性の議論」における魂の全体像」と題する三浦太一氏の研究発表が行われたほか、シンポジウムが催されました。テーマは「語りと沈黙——今日、宗教思想の行方——」で、提題者として田島 照久氏（早稲田大学教授）、永井晋氏（東洋大学教授）をお迎えし、そこに本学の田中 裕氏（本学哲学科教授）が加わり、フロアを交えての活発な討議が行われました。また、野矢茂樹氏（東京大学教授）より「バラは暗闇でも赤いか」と題した講演をいただきました。以下に報告記を掲載いたします。当日は多くの参加者を

得て、大会が盛況のうちに開催されましたことをご報告申し上げます。

なお、シンポジウムの各提題の内容は『哲学論集』第42号に掲載される予定です。どうぞご期待ください。

## 「バラは暗闇でも赤いか」

野矢 茂樹（東京大学教授）

野矢先生のご講演は、表題の問いを中心とした、色の知覚に関するものであった。この問いは、「バラは誰が見ていなくとも赤いか」というもう一つの問いと密接に関連しており、野矢先生は第一の問いには「ノー」、第二の問いには「イエス」と答えるための理論的根拠づけを探られる。

問いの背景として野矢先生はまず、「無視点的/有視点的立ち現われ」という枠組みを導入し、知覚を意識現象ではない仕方で捉える方途を見出される。我々の世界の捉え方には、「吾妻橋の東にスカイツリーがある」というように特定の視点を持たない「無視点的立ち現われ」と、「吾妻橋からスカイツリーが見える」というように、任意の視点から開ける眺望としての「有視点的立ち現われ」の二種類がある。この任意の視点——野矢先生の言葉をお借りするなら「眺望点」——はあくまで世界の中にあり、そこから開ける知覚的眺望はすでに用意されたものである。つまり誰が見ていなくとも、吾妻橋からはスカイツリーが見えるのであって、眺望は実在しているのである。「知覚する」とは、この有視点的立ち現われ、つまりそこに実在している眺望と「出会う」ことに他ならない。一方、例えば痛みが、痛みの経験から独立してはありえないように、感覚は経験から独立してはおらず、その意味で実在的ではない。

表題の問いを、知覚的眺望の実在性と感覚的眺望の非実在性という上記の対立軸から捉え直せば、次のような形になるだろう。色は知覚的か感覚的か。素朴な日常的立場からは「色は感覚である」と答えたくなるが、すると誰も見ていないところでは物が色を持たないということになってしまう。しかし我々の世界は事実、彩りにあふれている。赤いバラは、それ自身が赤いのであって我々の心において赤いのではない。では色は物の性質なのか。その場合、件の二つの問いのどちらに対しても肯定的な解答が導かれることになるが、暗闇の中でもバラが赤いとは思えない。

野矢先生はここで虹の例を類比的に用いて、以上の難問に解決をもたらされる。虹は光がなければ存在しえず、ゆえに光は虹の存在条件である。これと同様に、光は色の存在条件なのではないか。物の性質が光が無いところでも変化することはない以上、色は感覚でもなければ物の性質でもなく、それは「世界の中に生じたできごと」なのだと言われれば野矢先生は結論づけられる。物は「色を発するという傾向性」を持つにすぎない。赤いバラは、光によって赤い

色を発するという傾向性を持ち、我々は光のもとで赤いバラの知覚的眺望を得る。しかし知覚的眺望は知覚経験とは独立に実在するため、誰が見ていなくとも光があれば赤いバラは赤く、光がなければ赤い色が生じることはないのである。

講演後の質疑応答では、ラッセルによるセンシビリア (sensibilia) の实在論との関連や、「有視点的立ち現われ」という形での世界把握における他我問題の回避可能性など多くの質問がフロアから寄せられ、非常に活発な議論がなされた。

(記:本学博士後期課程 辻 麻衣子)

#### ◆新入会員（五十音順に掲載）

蘆名伸明、井之川あゆみ、上野徳識、大澤真生、大山匠、桑原司、桑山裕喜子、栗原茅希、齊藤歩、佐藤美由紀、田村歩、土田明子、橋本啓、松本里美、村木穂高

#### ☆事務局からのお知らせ

◇今年度上智大学は100周年を迎えますが、それと同時に哲学科も100周年を迎えます。現在、上智哲学会委員会では記念行事として、哲学会秋の大会において通常とは異なった催しも企画しております。会員の皆様にはぜひともご参加いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

◇住所や電話番号の変更、所属等の移動があった方は、会費納入の郵便振替表の通信欄・葉書・メール (sarohoop@hotmail.com) 等で事務局までお知らせください。お送りしたものが「転居先不明」で返送されてくるケースが毎回散見されますので、ご協力をお願い申し上げます。とくに新入会員のみなさまで今年4月以降住所を変更された方は、入会后通信物が一切届かないということにもなりかねませんので、忘れずお知らせください。また、本学会会員名簿を作成するために昨年度末に「名簿情報登録用紙」を会員の皆様にお送りしました。必要事項を記入の上、事務局まで返信いただけますようお願い申し上げます。

(記:事務局 佐良土茂樹)

## 『哲学論集』原稿募集

『哲学論集』第43号（2014年10月刊行予定）に掲載する研究論文を下記の要領で募集いたします。

- 提出締切：2014年4月末日消印有効
- 字数制限：注を含め16,000字以内（400字詰め原稿用紙40枚以内）
- 注意事項：原稿はオリジナル1部とコピー4部、計5部を提出すること。ワープロ原稿（パソコンのもの）であることが望ましい。注込みの字数を必ず明記すること。

論文掲載権は、編集委員会に一任される。

※字数に関する規定が厳密になりましたので、注意してください。

### 【投稿先】

上智大学哲学会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学哲学研究室内

※持ち込みか、郵送でお願いします。

※問い合わせに関しましては、電話・ファックス・電子メールでも結構です。

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414

E-mail：sarahoop@hotmail.com